

ツムラストーリー

自然と健康を科学する



はじめに

一九二三（大正十二）年。初代津村重舎が自筆で書いた額の文面には、こんなことばが残されています。

「中将湯は奈良朝時代の祖先より伝来の婦人薬にして、卓絶の偉効あり」

「世の斯病者を救済するは、社会公益の一端にもなりて、意義ある事業なり」と。

「中将湯」をフラッグシップに、初代重舎は日本の伝統医薬である「漢方」に真の価値を見出していました。逆風吹き荒ぶ時代にあっても、その信念は少しも揺らぐことはありませんでした。

創業者の信念は、百数十年以上もの時を経て、「**自然と健康を科学する**」へと踏み固められてきました。

本ストーリーから、私たちの理念に宿る「伝統と革新」のDNAについて、そして何より、

この理念こそが、ツムラグループが社会とともに持続的に「価値を創造」していく根源であることを、皆さまの心にお届けできれば幸甚です。



ツムラストーリーは、あるお姫様の物語からはじまります。

一八九三（明治二六）年の創業以来、たくさんの方々にお育ていただいた私共「ツムラ」は、百数十年以上の歴史をつなぐ婦人良薬「中将湯」と、そのルーツである伝説の姫の話の話を避けては語れません。

時は、今から一二〇〇年以上も遡ります。

その姫は藤原鎌足の玄孫として、七四七年（奈良時代）豊成公と紫の間に生を享け、中将姫と名付けられました。

中将姫は、幼くして母を亡くし、義母にいじめられ、何度も命を奪われそうになりましたが、

豊成公の由来、松井嘉藤太の計らいで日張山（奈良県）に逃れ、人里離れた山奥に隠れ住むことになりました。

その際、当時の宗家が庵を立ててお世話をしたと言われているのですが、

実は、この宗家こそが津村順天堂 初代 津村重舎の母方の実家である藤村家だったのです。

ある日、中将姫は父に偶然発見され、無事に屋敷に戻りましたが、姫は栄華な生活を望まず、

父の許しを得て當麻寺に出家しました。

やがて、日張山 青蓮寺（七六五年に建立）の開祖となるのですが、當麻寺での仏道修行の傍ら、

人助けになるとの教えを受け、進んで薬草や薬方の知識を身に着け、その功德を庶民に施しました。

中将姫は二九歳でこの世を去りますが、姫が最初に身を隠したときに匿ったことが縁で、

婦人薬の処方箋を藤村家に伝授。藤村家ではこれを家伝薬として子孫に伝えられてきました。



女性に寄り添うという強い思いをもって、中将湯本舗 津村順天堂を創業しました。

初代津村重舎は、幼い頃からこの家伝薬の卓効を見聞しており、

「良薬を世に広めることは社会公益の一端を担う意義ある事業」と位置付け、

一八九三（明治二六）年四月十日、中将湯本舗 津村順天堂（現ツムラ）を創業。

家伝薬は、中将姫伝説から生まれたことから、婦人良薬「中将湯」と名付けました。

時は明治。近代日本の歴史が始まる中で、医学における西洋化も着実に進んでいきます。

一方で、当時の医学は富国強兵を背景として、軍医が中心だったため、一般の人々がその恩恵を受けるには、まだまだ十分とはいえない時代でもあり、女性や子供は、医療から取り残されていました。

そんな時代にあっても、初代重舎は、女性に寄り添う精神を胸に刻み、

婦人良薬「中将湯」ブランドをフラッグシップに、津村順天堂の舵を取りました。

「良い薬は、必ず社会の繁栄につながり、人々の幸せに貢献するはず」という強い思いが込められた、

「良薬は必ず売れる」の信念の下、初代重舎は、「中将湯」の品質管理、そして研究に重きを置きました。

原料を精選し、調剤を厳密にし、傍ら文明の学理に基づくエビデンスの確立が重要と位置付け、

特に薬効の確さの証明には、時間と費用を惜しみなく費やしたのです。

そして、その一環として、七名の著名な産婦人科の博士や教授に、「中将湯」の薬効を研究してもらいました。

これこそが、ツムラの**「自然と健康を科学する」**という経営理念の淵源となっているのです。



創業者のブランド戦略は「和魂洋才」そのものでした。

初代津村重舎は、広告戦略、ブランド戦略にも積極的に取り組みました。

特筆すべきは、創業からわずか一九日目、一八九三（明治二六）年四月二十九日の朝の新聞広告です。

当時にしては斬新にして大胆な構図の、ツムラ史上第一号となる大々的な新聞広告を展開し、

「中将湯」ブランドの認知を効果的に高める戦略に打って出しました。

中将姫をイメージした美人商標を入れた、「中将湯」の木版を紙面のど真ん中に置き、

商品の登場感、存在感をアピールすると共に、「中将湯」ブランドを視覚的にも強く印象付けました。

また、特に目を引いたのが、「中将湯」が産婦人科の権威によって、その薬効が研究されているとして、研究に関わった七名の博士や教授の名前と肩書きを、記事広告の形で発表したことでした。

加えて、広告の中で、「中将湯」のすべての販売店（当時五九ヶ所）を全国的に紹介したのです。

さらに、一八九五（明治二八）年には、日本初となる、中将姫の図柄を入れた巨大なガスイルミネーション広告を本社ビルに取り付け、道行く人の目を奪ったかと思えば、アドバレンス広告を他に先駆けて宣伝に活用するなど、広告の常識を覆す手法を積極的に取り入れ、常に話題をさらいました。

初代重舎のアイデアによる広告・ブランド戦略、そして「科学する」姿勢が功を奏し、西洋化の明治にあっても、日本の伝統医薬である「中将湯」は、大衆に受け入れられていきます。

やがて、創業の信念、「良薬は必ず売れる」を裏付けるかのように、「中将湯」ブランドは婦人薬の代表的な存在としての認知度が高まり、穏やかな追い風を受けながら、順風満帆に進み始めました。



世の中には、「偶然の産物」と言う言葉があります。
ツムラにも、奇跡的な偶然と遭遇した出来事がありました。

ある日、ひとりの社員がこんなことを言い出しました。

「中将湯の残りものをお風呂に入れてみたら、身体がとても温まり、汗疹が治まった」と。
残りものとは、「中将湯」を製造する過程で出る生薬の切れ端や粉で、

「このまま捨てるのもったいないのでは？」 「何かに応用できないか？」という、
素朴な疑問から生まれた、偶然の産物でした。

「ひよつとしたら・・・!？」 初代重舎は、持ち前のカンと好奇心から、この話をヒントに、
「中将湯」の新たな可能性を探りながら、開発に乗り出しました。

そして、一八九七（明治三〇）年。ついに、「浴剤」と言う、新たなカテゴリーを生み出すことに成功。
くすり湯 浴剤 「中将湯」の誕生となったのです。

この薬草風呂の発想は百数十年以上経った現在ツムラのくすり湯「バスハーブ」として、
世の人々の心と身体に、健康と癒し、そして温もりをお届けしています。



明治、大正、昭和と時代の大きなうねりのなかで、自ら新しい道を開拓してきたフロンティアスピリットのドラマが展開します。

一九五三（昭和二八）年、津村順天堂は創業六十周年を迎えました。

それを記念して、翌二九年二月から新女性薬として、中将湯糖衣錠「ラムール」を発売しました。

「ラムール」は、津村順天堂が経営の根本方針としてきた、「古い歴史と新しい技術」の下、

津村研究所が誇る、最新の科学的技術と設備によって、中将湯に含まれている成分の抽出に成功したものです。

この、日本古来の伝統を誇った薬の、近代化に成功したことは、漢方薬における新たな概念の幕開けとなり、

「中将湯」の後身と位置付け、津村順天堂をあげて、大きな期待と共に世に送り出しました。

また、薬禍事件で合成新薬に対する不信感が日々高まってきたことを受け、

生薬の安全性と効果に関心を呼び戻す、所謂、「漢方の復権」をかけて、一九五八（昭和三三）年に

カラーの文化映画「薬草の秘密」という映画を企画し、新東宝の教育映画部に依頼し、

ラムールの宣伝を兼ねて全国の都市で上映しました。

映画の内容を一言でいえばこうである。

西洋医学では純度の高い結晶である有機成分の抽出にだけ、新薬の価値を発見しようとしている。

ところが、薬草の根や葉の部分加工した生薬は純粋ではない。この純粋ではないところが、実は薬草の秘密であって、

従来からの有効成分として抽出されている以外の微量成分の中にも、薬効として非常に重要なものがある、

その秘密に解明の光をあてようとして、漢方医学が研究の歩みを続けている、というものです。

「薬草の秘密」は、当時の文部省が推薦とし、厚生省が選定とする映画となり、どこの都市でもご好評をいただき、

社会そのものの関心の高さが改めて浮き彫りになり、結果、漢方見直しの先駆的役割を果たすことになりました。



先人たちの思いや数々の挑戦を経て、
「自然と健康を科学する」、へと踏み固められてきました。

婦人良薬「中将湯」にはじまり、中将湯糖衣錠「ラムール」の誕生。

ラムールの技術開発を土台として、エキス顆粒化された一般用漢方製剤の発売。

そして、医療用漢方製剤の薬価基準収載という形で「漢方の復権」を見事に成し遂げました。

「漢方の復権」。そこにたどり着くまでには、文明開化、そして脱亜入欧がもたらした、大きな壁に苦しめられました。

一八七四（明治七）年、維新政府は、西洋医学の試験に合格したものでなければ医師となることができないという、漢方医学にとっては致命的ともなる法律を發布。

更に、漢方医たちの法改正への請願もむなしく、一八九五（明治二十八）年の国会で漢医継続願いが否決され、結果、西洋医学を勉強し、その上で漢方に興味をもつ医師は、ごくごく少数となり、漢方の衰退は当然の帰結となりました。

津村順天堂の創業は一八九三（明治二六）年。漢方にとっては逆風の真ただ中にあっても、

初代津村重舎は、この少数の医師たちの漢方研究に、早くから注目していました。

そして漢方医や本草学者たちに、物心両面で温い手を差し伸べたのです。

西洋化の大きなうねりが押し寄せる中、初代重舎は、なぜ「漢方」に目を向け続けたのでしょうか。

それは、「中将湯」の偉効から、日本の伝統医薬である「漢方」そして「生薬」に、価値を見出し、その価値を誰よりも信じていたことに他ならないのです。

そして、その価値を証明するために、初代重舎は「科学する」ことに徹しました。

「中将湯」の事業が軌道に乗ると、一九二四（大正十三）年、和漢薬を主体とした生薬の研究所（津村研究所）と、薬草園（津村薬用植物園）をつくり、いっしょに漢方・生薬研究の礎を築いたのです。



一九四一（昭和一六）年の春、初代重舎が他界。そのバトンは長男基太郎に継がれました。初代の遺志を継いだ基太郎は、二代目社長として津村重舎を襲名。

「漢方製剤の作用機序の科学的研究は、将来の医学と薬学における大きなテーマとして、人類の前にある」
「漢方の未知の世界が、人類の英知によって、ひとつひとつベールが開かれていけば、それは世界の医薬の革命ということになる」との考えから、「漢方を科学する」という、津村順天堂の社風が築かれました。

その後、二代目重舎は、一九五七（昭和三二）年、東京日本橋に漢方専門の「中将湯ビル診療所」を創設させました。この診療所では、漢方医学の処方によって来診者の手当をすることで、その結果が診療所に集められることになる。そして、その結果を集積することによって漢方薬が学理的に認められる土台となる。漢方薬をいつまでも売薬、家庭薬としていたのではそれはできない。

明治の漢方医たちは、それができなかったばかりに西洋医学に敗れ去ったのである。故に、二代目重舎は、初代の思いを受け継ぎ、漢方専門の診療所創設に執念を燃やしたのです。初代そして二代に継がれたバトンは、研究所―薬草園―診療所という三つの礎石として結実し、ここに「自然と健康を科学する」というしくみが見事に完成したのです。

「科学する」しくみを築き上げた二代目重舎の挑戦は、ここで終わりません。

一九七六（昭和五一）年、ツムラ医療用漢方製剤が薬価基準に収載されます。この報告を受けた時、二代目重舎は「遂にやった」という喜びと同時に、責任の重大さを強く感じました。

「これからは、病院の医師の需要に、常時応じられるよう、供給体制を確立しておかねばならない。薬の量と質、それから価格の安定にも、一段と注意を払わねばならない。

そのように、万全を期すためには、中国の原材料の輸入に、なんとしても道をつけておく必要がある。津村順天堂の保険薬の成否は、中国にある」と、先を読んだ二代目重舎は、日中生薬交渉に情熱を傾けました。その歴史と実績、そして信頼の積み重ねが、現在の原料生薬の供給体制へと継承されているのです。



これまでも、これからも。

「自然と健康を科学する」ツムラです。

企業の社会価値や経済価値は、過去・現在・未来の「持続」のなかで決まります。

ゆえに、ツムラが考える「事業戦略」の定義は、

「長期的な将来を見据え、新たな市場取引を創造し、それによって、人々の幸福度を増進させるもの」であり、その目的は、「長期利益の最大化」にあります。

その上で、国内事業の戦略を「漢方医学の確立」、中国事業の戦略を「中国国民の健康への貢献」とし、ツムラグループが一体となり、企業価値の向上に取り組んでいます。

「戦略」を考え、固めていくためには、「歴史と正しく向き合う」ことが必然です。

なぜ、「**自然と健康を科学する**」なのかを真に理解することで、「未来を創造できる」のです。

ツムラの基本基調である「**伝統と革新**」の本質について、私たちはこう考えます。

伝統とは「歴史と正しく向き合う」精神であり、革新とは、『未来の創造に向けて果敢に挑戦する』精神である。そして、革新の根柢にあるのは、『価値を見出す力』と『価値を信じる力』、つまり『信念』であると。



おわりに

私たちツムラは、事業をおこなう上での原理・原則・理法であるプリンシプル「順天の精神」のもと、「究極的に成し遂げる事業の志」であるパーパス「一人ひとりの、生きるに、活きる。」を掲げた理念経営、ビジョン経営を実践しております。

このパーパスは、創業者津村重舎の志であり、「社会公益の一端となる事業」を目指した創業の原点です。パーパスは、創業の原点と現在、そして未来を結び、私たちツムラが社会的使命として、誰一人として取り残すことのない社会を創るという強い決意、究極的に成し遂げる事業の志です。

ツムラストーリーの最後に、初代津村重舎が遺した言葉を紹介いたします。

「余は終始此の信念を以て原料を精選し、
調剤を厳密にし、傍ら文明の学理に基づき、
研究に研究を重ね、多々益々薬効の的確を期する。
大小幾多の艱難辛苦に遭遇せしも、
初一念貫徹を期すべく、
百折不屈、益々勇を鼓し、誠意経営に努力し来り」



二〇一九年(令和元年)十月二十五日 発行

編集 集 株式会社 ツムラ ツムラアカデミー室

編集協力 株式会社 日本ブランド&リサーチ

協力 株式会社 ツムラ ヘルスケア部

イラスト 上村 恭子

参考文献 『漢方の花』順天堂実記

『伝統と革新』株式会社ツムラ創業125年史

語り 山本 雄二

音源編集 株式会社 メディア・アート・ラッシュ